

「湯本清比古」のその後を追う

佐藤 邦夫

寅彦ファンなら湯本清比古と言う名をご存知のはずです（寅彦先生の記事に何度も出てきます）。中谷宇吉郎の随筆「球皮事件」には、宇吉郎と湯本清比古のふたりで寅彦先生の敵を討つため、夜遅くまで猛勉強したことが書かれています。湯本清比古は宇吉郎の寺田研究室の一年先輩でした。（清比古、宇吉郎、平田森三の3人を“寺田研究室の三羽鳥”と言ったそうです。）

宇吉郎の北大の弟子・井上直一が理化学研究所（通称：理研）を訪ねた際にも寺田研究室に湯本がいて、親しく「理研」の中を案内してくれたそうですから、湯本は寺田研究室に最初から最後までいた唯一の人かも知れません。1935年大晦日に寅彦先生は亡くなられ、その後、寺田研究室の研究員はちりぢりになったわけですが、湯本清比古は「日立製作所に転じた」とされています。

そこで、湯本清比古のその後を追跡してみました。筆者は日立製作所の一工場に勤務していたので、調べるには好都合だと考えたわけです。

勤務先にあった小さな図書室に行って、社内の動静を記録した『日立社報』（以下、単に『社報』と記す）を紐解きました。先ず調べたのが、いつ日立に入社したのか、ということです。「人事異動」の記事欄を、名前末尾の「古」を目当てに探しました。その結果、合計で12回「湯本清比古」を発見しました。最初に見つかったのは1940（昭和15）年8月の『社報』でした。

新任 四月十日 亀有工場兵器部員 湯本清比古
寅彦亡き後4年余経ってからの入社だったことが分かりました（このとき43歳と推測されます）。

亀有工場というのは当時の日立の主力工場の一つで、重機械を作っていた所です。戦前はどこの会社にも兵器部門があったようです。（この亀有工場の流れを汲むのが、現在の茨城県土浦市にある日立インダストリアルと日立建機の工場です。）

入社翌年、兵器部から試験部の研究課に異動（適材適所の人事と思われず）、1943年には試験部研究課長に昇進しました。（筆者はこれを知って嬉しくなりました。同じ職位を勤めたのです。）

戦後の1946年には中央研究所（略称は〔中研〕：ちゅうけん）へ転勤になりました。〔中研〕は東京都国分寺市に設立され、後に日立の顔となる研究所へと発展しました。ここは研究室制・主任研究

員制でしたので湯本にとって「理研」と似た環境だった筈です。1年半後（1948年1月）部長待遇に昇進しています。〔中研〕の研究発表会の記録を見ると、「挨拶：湯本部長」とか、「閉会の辞：湯本部長」という文字があり、その様子が彷彿とします。〔中研〕の研究所史によると、湯本清比古は所内の図書委員長をやっています。また、工業技術院・電気試験所のインダクタンスの規準作りにも関わりました。当時、質の高い無酸素銅は日本では日立の〔中研〕でしか作れなかったようです。

1957年1月20日に停年退職しました（肩書きは「主任研究員副参事」でした）。日立製作所で17年間勤務したのです。研究者としては遅い転身でしたが、民間企業では恵まれた環境での研究人生だった筈です。恩師の寅彦先生に倣って、長につく立場（部長）には一時期しか着きませんでした。（注：日立製作所の主任研究員という職位は、研究職の中で課長以上の、れっきとした管理職なのですが…。）



左は65歳頃の湯本清比古（『雪氷』から転載しました。これは宇吉郎追悼特集の座談会で撮影したものです。この頃は業界団体「東京原子力産業会」の事務局長を務めていました。）

『社報』に載った最後は1994（平成6）年6月のつぎの記事でした。

訃音 湯本清比古 4月19日 享年97歳

職歴〔中研〕第二部長

長生きされたことが分かりました。なお、職歴には1948年（52歳）頃の職位が充ててあります。

なお、湯本清比古というと、よく日立の中央研究所長を務めたと書かれていますが、間違いなのです。たぶん、同時期に日立に勤務し、第2代中央研究所長を務めた鳥山四男と混同してのことなのだと思います。（この鳥山について、別に稿をあらためて記すつもりです。）

* * * * *

さて、中谷宇吉郎は「理研」寺田研究室に入る前、あの島津製作所への就職を考えたことがありました。そして、晩年には「会社に入っていたら、今頃は重役になっていたね。」と言っていたそうです。確かに宇吉郎の才覚を以てすれば、トップの社長まで登りつめたかも知れませぬ。

初稿 2004. 2. 10（改訂 2011. 7. 12）